

デジタルネイティブ世代のオンライン教育の意義と課題 ——国内外ソーシャルメディアの活用に関する一考察——

山田亜紀

はじめに

21世紀に入り、情報技術をはじめとするテクノロジーが人々の日常生活の隅々まで行き渡り、我々の日々の暮らしはテクノロジーとは切り離せなくなっている。技術の発展が加速的に進み、世界規模でも革新的な影響をもたらしている。日本では情報技術とAIによってもたらされる新たな社会のモデルとして、「ソサエティ 5.0」という用語で示されたように、デジタル技術が我々の日常生活に急速に浸透していくことが予想される。これは日本国内のみで見られる傾向ではなく、世界を見渡してもあらゆる面で先端技術が極めて大きな役割を果たしてきた。とりわけ、昨今のコロナ禍の中で情報技術が果たした役割は一層顕著になっている。こうした社会的背景を受け、スマートフォン、デスクトップ・ノートパソコン、タブレットなどのデジタルデバイスがコミュニケーション・ツールとしても機能を果たし、我々の生活様式や生活の質向上にとって不可欠な存在となっている。今世紀に入り、インターネットによるコミュニケーションは我々の生活の一部となったが、未曾有のコロナ禍では、かつては対面によって初めて成立する人々の関係性が、インターネット上のやり取りを軸に、デジタル媒体を通してコミュニケーションを取る時代に変化している。

デジタル化の進捗とともにこうした背景を受け、デジタル化の必要性が増加してきたが、加えてCOVID-19パンデミック下において、実際の高等教育の現場ではどのようにこれらの課題に直面していたのだろうか。本稿では、COVID-19パンデミック下での高等教育の現場で、筆者が国際的課題を扱う講義や関連した正課内外の活動で、日本のデジタルネイティブ世代がどのようにソーシャルメディアを活用し学びに繋げていたのかについて、国内外ソーシャルメディアを活用する実態の把握を通じて考察することを目的とする。

1. デジタル世代の学び

オンラインとデジタル技術を介して、人々が瞬時にコミュニケーションを取ることが可能となり、それに伴いより多くのコミュニケーション・ツールが、あらゆる場面で多岐にわたって活用されてきた。実際の教育の場を目を向けてみると、新しいテクノロジーの応用は時間が経つと共に広がり、その可能性も拡大を続けていくと指摘されている(Gourlay:2013)。教育現場でも、従来からテクノロジーは発展していたが、昨今のコロナ禍がこうした傾向に拍車をかけている。高等教育の現場を例にとれば、具体的には、従来型の対面授業と事前に録画した講義、コンテンツを提示するためのスライド、ビデオによるプレゼンテーションなど、オンラインを通じて構築された学習環境がCOVID-19パンデミック下で大きな役割を果たした。今後もテクノロジーを活用した指導方法や学び方などを、多岐に渡って組み合わせ、活用することが予想される。それらのニーズと必要性が増加する傾向は、国内だけではなく、世界各国でも見られる。国境を越えてさまざまな教育現場でデジタルツールが活用されることは、たとえ物理的に離れていても世界各国の人々が学びと教育に対して直面した共通の現象である。いかにテクノロジーを活用しながら教育の質と学びの機会を担保するか、コロナ禍による制限が課せられている環境においてどのようにオンライン学習での課題を解決していくかは、世界中の教育現場の共通した問いでもあった。そのような状況は教室でのいわゆる「対面」授業という伝統的な学びの場も影響したことは間違いがない。学生が従来の意味での対面型授業から切り離されることが増えたのは、COVID-19パンデミック下での国内外の教育現場が同時期に直面したイシューであった。各々国や地域は、文化的・歴史的な違いがあるものの、共通して見られるのは、従来の対面型授業からオンライン授業の導入に向けてデジタル技術が果たした大きな役割である。

新しい情報通信技術（ICT）、ソーシャルメディア、そしてインターネットの急成長は、個人が世界中の情報やコミュニケーションに瞬時にアクセスすることを可能にし、とりわけ若い世代は、人生の大半がソーシャルメディアと深く絡み合ってきた世代とも考えられるのではないだろうか。デジタルネイティブ世代にとって、オンラインでの学びの意味を検討する必要があるように思われる。

高橋（2014）は、「デジタル世代」を「デジタルが加速に進む社会でいき、デジタルを大いに活用し、それを巧みに扱える世代」と定義している。本稿では、高橋が述べる「デジタル時代に生まれ育ったデジタルネイティブ世代」を対象に据え、いかにデジタルネイティブ世代の学生たちが高等教育の学びの場で、デジタルツールを活用しながら国内外の情報を取捨選択しているのかに着目をする。また学びに結びつけているかに着目をする中で、米国ではデジタル技術がより身近となった1980年代生まれで、デジタルリテラシーを身につけていると同時に、グローバルな文化を共有し、絶えず互いに繋がっているのがデジタルネイティブだとみなされている（Palfrey & Gasser 2008）。デジタルツールに対するニーズは、コロナ前よりはさらに増大することになり、場合によっては人々自体が依存しなければならないともいえる。そのような社会環境の状況が変化した中、もとよりデジタルツールを自然に受け入れているデジタルネイティブ世代は、ますますその依存の度合いを深めていると推察できる。それゆえ、改めてデジタルネイティブの背景、多様性、またデジタルツールを応用する目的の変化にも着目する必要があるのではないだろうか。

木村（2012）はデジタルネイティブについてさらに細分化した定義を提示し、以下の四世代に区分している。1) 第一世代：1982年生まれ、2) 第二世代：1983～1987年生まれ、3) 第三世代1988～1990年生まれ、4) 第四世代1991年生まれである。本稿の研究対象である2000年以降生まれの世代は、はたして第四世代に当たるか、または別の世代に分類しなければならないかはさておき、時代と共にデジタルツールそのものが大きく変化し、またユーザーの層も変化したのは、木村論文の指摘するところの通りであろう。また、デジタル環境やツールの変化、ユーザーの意識の変化だけでなく、やはりCOVID-19以降におけるデジタルの需要は、COVID-19以前の社会とは大きく異なるのではないだろうか。とりわけ教育の場におけるデジタルに関する学生の対応の変化にも細心の注意を払うことも不可欠である。

コロナ禍で学ぶ機会が対面からオンライン、デジタルに変化した時期を経験した学生たちは、暫定的でインフォーマルな教育の場をソーシャルメディアに求め、フレキシブルに取り入れていることも観察される。海外の事象に関する知識の獲得方法やアイデンティティの形成に特に影響をもたらしている傾向にある。なぜならば2019年末以来のCOVID-19パンデミックの影響により、人々はソーシャルメディアなどの遠隔コミュニケーションのプラットフォームにさらに頼るようになり、むしろ頼らなければ外の情報が簡単に入手できなかったからである。パンデミック下の行動制限によって、学生たちは他者と日常的に直に触れ合う機会が減り、仲間からも孤立するようになり、旅行や海外留学にも新たな制限が課せられた。本来、理想的な学びの形としては、座学で理論的に知識を獲得するだけではなく、現場に赴き、直接肌で触れ、実体験を通して学ぶのが、より学びへの刺激やインスピレーションに繋がり、知識と実践の往還が可能となる。こうした知識の習得を超えた学習体験を、果たしてオンライン教育でどのように経験・獲得したのだろうか。

次節以降、先行研究の検討を行い、国内外のオンライン教育を対象に、事例研究として2019-2022年に在籍した日本の学部生の学びの課題とオンラインへの受け止め方、活用方法をもとに、彼らがどのようにオンライン情報ソースを活用し認識しているのかに焦点を絞る。それらの情報に触れ、どのように受け止め、学びの手段として知識を習得したのか、またこれらの情報がどのように学生のグローバル化に対応した能力や知識に影響しているかという課題設定のもと、調査をベースにした事例研究の分析を通じてこうした問いを検討する。

2. 先行研究の検討

2-1. パンデミック時におけるソーシャルネットワークやソーシャルメディアの教育活用の事例

パンデミックのロックダウン中、ソーシャルメディアとインターネットは、孤立したオンライン学習環境で学ぶ世界中の学生をつなげるために、非常に重要な役割を果たしたと考えられる。黄（2022）は「日本に留学している中国人留学生の不安と抑うつについて、特に海外で生活し学業を続けている留学生の方が母国の学生より不安やストレスを抱えやすい」（63頁）と、留学生であるがゆえに孤独に陥りやすいこと述べている。留学生はより孤立した状況にあるとすれば、COVID-19パンデミッ

ク状況下におけるソーシャルメディアの活用は彼・彼女等にとっても重要となるだろう。

さて、異文化と触れ合うために必要不可欠な直接対面、現地訪問、参与観察などが容易にできなくなっていった。しかしながら、単位の履修が必要な場合、世界の教育機関では様々な学びの代替を模索しなければならなくなった。事実、多くの若い世代特に新入生の多くは、スマートフォンやパソコンを所有しており、海外の出来事やトピックに関する最新情報をオンラインで入手するノウハウが身に付いており、彼・彼女等はデジタルが発達している時代で育ってきた世代であることから、より身近にこれらを活用している。国内外のパンデミック時のオンライン教育にソーシャルメディアやソーシャルネットワークの活用に関する研究例として、Pew Research Center (2021) は、米国の成人の72%が1つ以上のソーシャルメディアを使用していると提示している。その中で過去に主要なプラットフォームを使用したことがあると回答した人の割合はYouTube(81%), Facebook(69%), Instagram (40%), Pinterest (31%), LinkedIn (28%), Snapchat (25%) であると示しており、多岐に渡るソーシャルメディア・ツールが存在していることが認識できる。いわゆる「デジタルネイティブ」に当たらない成人でさえ、このような高い割合でソーシャルメディアを使用している。言うまでもなく、若者世代の間ではソーシャルメディアが浸透していることは自明であろう。日常に浸透したソーシャルメディアは、徐々にこのようなテクノロジーを教育の現場に応用し、また有意義なツールとして使用する新たな機会を教育機関に提示してきたとみなされるだろう。

換言すれば、自由な時間と学びの時間と双方でデジタルが多く活用される時代を生きる若者世代にとって、常にテクノロジーは彼らの生活の一部、そして学びの一部として浸透しているということが考えられる。とりわけデジタルを通して生活し、触れ合い、また情報なども取捨選択し、学びの機会にも応用するのが情報社会と学びの時代でもある。しかしCOVID-19パンデミック下で、容易に自由に外出、対面で人に会うことが難しくなったため、それを補うかのようにソーシャルネットワークやソーシャルメディアの活用が増加した。いわば、オンラインで繋がるために、上記のツールは必然的に不可欠になったとも考えられる。

米国の例だけではなく、同じパンデミック時におけるインドのケースを見てみよう。インド東部の学生360人を対象としたAnsari & Khan (2020) の調査では、ソーシャ

ルメディアを、学習や教員と学生による共同研究に活用したことで、学生の積極的な関与や仲間同士の交流、成績の向上につながったことが示されている。このことからAnsari & Khan (2020) は、ソーシャルメディアはリモート学習やオンラインのディスカッショングループなど、デジタルの交流における有益なツールになり得ると結論づけている。この事例は個々の学びだけではなくさらに他者との交流にもつなげがるというプロセスが示されている。

ソーシャルメディアは、知識の共有および拡散のための機会を高等教育機関にもたらす機能を果たしているのではないか。特にパンデミック時の学生の学習過程を観察してみると、教室で教科書を使って行う従来型学習と、学生が教室外でデジタルを通じて学術情報にアプローチする方法および教室外で学習にアプローチする方法との間には、明確な違いが存在する。例として、学生はソーシャルメディアを使って教育関連の情報をやりとりした時には自発かつ主体的に検索をし、ましてや最新の出来事を習得する情報を取捨選択し時には拡散するだけでなく、国内および海外にネットワークを広げることも可能となる。

COVID-19以前のパキスタンの事例として、Hussain (2012) は、パキスタンのバハワルプールにあるイスラミア大学でソーシャルメディア利用に関する調査を行い、538人の回答者のうち、何らかのソーシャルメディアを利用している人は90%、毎日利用している人は71.4%、毎週利用している人は17.4%という結果を得ていることを報告した。大学でのネットワーク作りに利用していると回答した学生の割合は87%、大学行事の共有に利用していると回答した学生の割合は59%に上っていた。COVID-19以前の調査ではあるが、高い割合で学生たちがソーシャルメディアを活用し、対面同士でネットワークを築き、よりスピーディーなオンライン手法で大学間でのネットワーク作りに活用していたことが明らかとなった。

ヴァルナ経済大学のAleksandrova & Parusheva (2019) が行った調査では、回答した学生の80%が他の学生とコミュニケーションを取る主な手段としてFacebookのグループ機能を挙げた一方で、教師との連絡には電子メールや電子的な学習管理システムを利用することが多いと回答していた。このように、ソーシャルメディアは教師から学生へのトップダウン型やり取りには向かない可能性があるものの、学生同士の共同作業や、知識の獲得および共有においては重要な役割を果たしていると推

察できる。学生同士と教員との連絡手段としてもユーザーである学生にとっては気軽に知識の習得、共有において、いかにソーシャルメディアが新たなツールと手段であるかの証左といえるだろう。そしてそれはより対人関係の維持が難しくなったCOVID-19パンデミック下においてより顕著にソーシャルメディアの需要と必要性も高まったのではないか。

ソーシャルメディアのもう1つの重要な側面は、より多くの人が日常的な活動の範疇を超えて自由かつ便利にアクセスし、次に好奇心を追求して特定の関心領域に対する知識を広げることが可能にするという点である。こうしたプラットフォームが提供しているコンテンツは、とりわけ活気があり、また興味も誘発し、同時に共感した仲間がコメントを書きやすいフォーマットで作られている。このプロセスは、これまでの読書を典型とする紙などの媒体を通して得ていた情報源に比べると、非常にアプローチしやすいものであり、気軽さが強みでもある。しかし必ずしもユーザーのすべての人々がその使い方、情報の信憑性や、デジタル情報におけるリテラシーを認識、把握しているわけでもなく、必ずしもオンライン教育におけるソーシャルメディアの活用が、肯定的であるとは限らない。川嶋(2021)はCOVID-19パンデミック下の米国でオンライン教育のデリバリーが余儀なくされた状況下で、社会的経済的格差は突然のオンライン化で一層拡大していると指摘している。その中で、公教育を通じたマイノリティ生徒への資源の再分配を日本以上に意識したにもかかわらず、コロナ化によるオンライン授業への移行や保護者の学校関与の増加により、移民生徒たちの教育機会やウェルビーイングの侵害が深刻化して行くとみなしている(額賀, 高橋2021)。

これらのように国内外が同じパンデミック時に、学びの場でどのようにオンラインツール、ソースを駆使して活用していたかを考えると、必然的にこれらのツールの需要がこれまで以上に強く求められていたことが示唆されると同時に、大きな課題にも直面していたことが考えられる。オンライン教育が可能にしたことの肯定的な面だけではなく、先行研究でもメディアリテラシーの課題について、多く触れられていると同時に、パンデミックによって直面したメディアリテラシーの新たな課題と次の方向性にも国内外の教育機関は直面しているといえよう。

2-2. ソーシャルメディアとユーザーのアイデンティティ

今日のソーシャルメディアを利用し、それと共存して

いくデジタルネイティブ世代にとって、ソーシャルメディア自身が提供するプラットフォーム、そして幅広いコンテンツを提供していく中で、これがいかに個々の彼らのアイデンティティ形成に影響を及ぼしているのだろうか。次に学びのきっかけという側面に着目すると、現場には上記のツールがどのように影響を及ぼしているのだろうか。教員がいかにソーシャルメディア利用を教育上の文脈に取り入れ、より学生たちが学びの意欲に強く影響したかについて検討し、これらのテクノロジーは、強化された社会的自律性とも関連しているといった指摘もある(Selwyn 2012)。Selwyn (2012)は、実際に、若い人々は、いまや、自分の行動の内容と形式だけでなく、それをどこで、いつ、どのように行うのか、その多くを自分でコントロールすることに慣れきっている。実際にソーシャルメディアのユーザーは、強化された自己組織化や自給自足の能力を身に付けており、学生自身が学ぶためのスキル育成に影響していると説明している。

現在のように急速な情報化やグローバル化が進む前は、学生がグローバルに対応したスキルや世界に対する理解を得る主な方法は、海外を旅行し、関心のあるコミュニティを観察して交流することであった。現在は、新たなテクノロジーによって、リモート学習や、広く普及したソーシャルメディアへのアクセスが可能になり、そうしたグローバルな能力を伸ばす別の手段が生まれている。学生たちはそのようなソーシャルメディアやWeb 2.0のプラットフォームを通じて、ほぼすべてのニュース、趣味、専門知識などに関する自分の考えを世界規模で共有することができる。Moreira (2016)は、オンライン学習はグローバル化したアクセス性を拡大させ、それにより、国境はもはや、専門的な教育の道筋を選び目標を追求したいと考える個人にとって障壁ではなくなってきたと指摘し、オンライン教育が海外からの入学を促しやすく、それがさまざまな国籍、人種、文化間の交流を可能にしている、という点を強調している。

この観点からは、リモートとオンラインの学習が持つ、教育における国際化の取り組みを発展させる潜在性が示されている。オンライン学習は、学生が自分のナショナルアイデンティティについて、そしてグローバルな場でそのアイデンティティをどう位置づけるべきかについて検討する上で確固たるツールになり得ると考える。成田(2012)は、バーチャルリアリティ空間におけるアイデンティティ形成を明らかに新しい現実の条件を生み出し、またインターネットの中で作られる関係はそうした状況にあるアイデンティティ形成に何らかの変容をもた

らすものであるとも述べている。

ソーシャルメディアの顕著な特徴の1つが、コミュニケーションを双方向で行える点である。その高いアクセシビリティと相互作用的な性質から、ソーシャルメディアは、とりわけCOVID-19発生時のロックダウン中には、多くの対面でのやり取りに置き換わる主要な手段となった。ソーシャルメディアのユーザーは自分の考えを共有し、自らのアイデンティティや価値観と共鳴するアイデアやメッセージを表現することができる。インターネットにも開始当初からそのような機能は広く備わっていたが、ソーシャルメディアは、より広い範囲で、ユーザーが個人的なつながりのない大勢の他のユーザーとすぐにフォローしあうことを可能にした。それにより、ユーザーは自らのアイデンティティを創造あるいは再創造し、自分の考えを共有して、海外のユーザーの心を容易に動かせるようになった。

Selwyn (2012) は、つながりが強く集合的かつ創造的というソーシャルメディア・アプリケーションの性質には、より柔軟で流動的な、速度を増した生き方が反映され、かつそうした生き方をある程度加速させていると主張した。

これらの先行研究からソーシャルメディアのユーザーは、膨大な数の情報をいとも簡単にフィルタリングし、瞬時にアクセスすることができ、今日まで可能ではなかった情報量へのアクセスとそこから厳選し選ぶことが可能になったとも読み取れる。新たなコンテンツが次々に作られるため、ユーザーが作成したコンテンツの数は実質的に無限である。まず、それにより、ユーザーがソーシャルメディアを介してあらゆる利益団体と関わったり参加したりすることが可能となり、素早く形成し再定義できる超個人的な感覚が生み出される。第二に、ソーシャルメディアは、自分が選んだアイデンティティや価値観を提示し、気の合う他者と積極的につながることによってそうした考え方を強化する手段となり得る。

オンライン教育によって海外に関する知識を広げることが可能であるが、それが、学生自身の文化やナショナルアイデンティティを理解し定義する方法に及ぼす影響についても我々は考慮する必要がある。特にグローバル化では海外とのつながりの増大により、文化的多様性のある程度の均質化が必然的に伴うと考えられる。しかし同時に、異なる文化について学び、自身の文化的遺産を文脈のなかに当てはめる明確な機会ももたしていることも考えられる。このことは、オンラインでのコミュニケーションの拡大と発展を通じて、複数の視点が出現す

ることになるため、個人が自らのアイデンティティを客観的および主観的に眺める方法に影響するのではないだろうか。

Tomlinson (2003) は、1980年代以降、一部の人々が主張するようにグローバル化が共有されたグローバルな文化的ヘゲモニーへと貢献しておらず、むしろ特定地域において生活の一部に過ぎなかった文化的アイデンティティを増幅させたと主張している。Tomlinsonは、多くの人々が資本主義の後にはグローバルな西洋文化のヘゲモニーが続くと考えていたが、そうはならずグローバル化がこの流れに抵抗する局地的な文化を生み出したと詳述している。世界各地の無数の文化やナショナルアイデンティティに触れる機会が増えれば、その土地ではありふれたものとみなされている事柄を細かく分解し、これをより大きなグローバルな文脈の中で何らかの独特かつ重要なものへと昇華させることが可能であることは理解できる。電気通信や交通手段の発達は、そのような局地的なアイデンティティの顕在化を妨げてきた地理的な距離や国境を取り除くことに貢献した。同様に、ソーシャルメディアが人々に、自らの関心や価値観を仲間と比べる無限の機会をもたらししていることも理解できる。世界中の人々と交流し、コンテンツを共有したり閲覧したりできることは、グローバルな文脈の中で文化的アイデンティティやナショナルアイデンティティを形成することを可能にする。その中で21世紀は、海外との行き来がはるかに容易になり、人々に世界情勢と関わるための媒介手段をもたらし、また交通および通信手段の発達は、人、物、金、考えの移動をそれまでよりもはるかに容易にした。

3. 調査の概要

COVID-19パンデミックにより、オンライン教育が余儀なくされた状況において本研究では主にアンケート調査の自由記述とインタビュー調査を実施し、高等教育に所属する異文化教育や比較教育など国際的なフィールドをカバーする教員3名（アメリカ2名と台湾⁽¹⁾1名）と日本の学部生28名に自由記述型アンケートによる調査を行った。高等教育に所属する教員3名には、個別でインタビューを行い、同じコロナ禍におけるアメリカと台湾の高等教育で教える教員が各大学に通うデジタルネイティブ世代に対して、オンライン教育をどのように彼らが受け止めていたのか、また異文化教育という視点をオンラインでどのように教え、直面した課題、また新たな

オンライン教育の前には気づかなかった発見などについて、答えてもらった。

日本の学部生には、オンライン教育の中で、異国の文化、異分野をどのように情報を習得し、オンラインから得る情報の活用の仕方などについて、自由記述型アンケートによる調査を行った。調査の目的は、大学で教員から学ぶ場合と独力で情報を見つける場合とで、学生たちが自らを位置づける方法に違いがあるかどうかを尋ねることだった。その後、口頭でのフォローアップインタビューを行った。アンケート調査の分析過程で、学生たちが、オンライン授業の最中にどのように学び、どのように自らの知識を使用して、批判的思考を授業のテーマに適用しているのかを再検討したいと考えたからである。COVID-19以前のように海外に出かけることはできなくなったものの、学生たちは、国際問題の新しい側面を理解し目撃するための要素としてソーシャルメディアやビデオプラットフォームの新たな情報源を使用し始めていたことを、アンケート調査を通じて把握したことも大きい。アンケート調査とその後のフォローアップインタビューのプロセスを通じて、学生たちが調査すべき国際問題をどのように選んでいるのかについて、また、パンデミック下のオンライン授業においてソーシャルメディアのプラットフォームを学習教材として取り入れることをどのように認識していたのかについて、いくつかの洞察を得ることができた。

回答を通じて学生たちが、オンライン授業がどのように自分の学習サイクルの一部になっていったか、また、彼らがソーシャルメディアやライブストリーミングの情報源をどのように捉えているのかについて把握できた。以下に、彼らの回答から見える意見や見解の一部を抜粋する。

4. 学生たちの回答から見える意見・見解の分析

表1. ソーシャルメディアの活用と意義についての
学生の自由記述回答

ソーシャルメディアの活用と意義について
<p>ソーシャルメディアのユーザーは、自分が示した情報の情報源を教えないことがある。だから自分はいつも懐疑的な目で見ています。しかし、渡航制限が出て旅行して現地に行くことができなくなったため、ソーシャルメディアを使わざるを得なくなった。その結果、ソーシャルメディアに対する私の考え方は、COVID-19以前から変化した。今後はソーシャルメディアと共存していかなければならないだろう。</p>

う。したがって、今回のことは、自分の生活にこの情報源をどう活かしていくべきかを改めて考えるよい試練となり、節目となった。

このような（COVID-19パンデミックの）状況ではあまり外出できないので、ソーシャルメディアは不可欠だと思う。でも、状況が変わったら、その捉え方も変わるかもしれない。

ソーシャルメディアによって費用をかけずに異文化を体験することが可能になった。

自分はこれまで、校閲された記事や教科書から情報を得ていたが、さらに詳細な情報を得るためにソーシャルメディアも使用していた。自分は、ソーシャルメディアのコンテンツの中には、深みに欠けるものがあることに気づいた。上記のような情報源をすべて使ってみるまで、自分はそうしたことを考えたことがなく、使ってみたことでそれらを比較することができた。

上記の第一段階のアンケート調査に回答した学生の回答から、この調査に参加した学生たちは、この特殊な期間中にオンライン情報源やソーシャルメディアを使用しているときの、自分たちの立ち位置を把握していたことがうかがえる。特に、その後のフォローアップインタビュー調査に参加した学生たちは、COVID-19パンデミックがもたらした社会的影響の下で生活し、現在もその影響を受けて生活している状況において自分たちの声を周りに伝えることが自分にとってなぜ重要であるのかを十分に理解していた。コロナ禍が今後どれくらいの期間続くのか、また新しいウイルス株の登場により今後も正常な状態に戻るものが遅滞するのかは、予測できないという状況において、学生たちが、私生活だけでなく学術的知識を広げるためにもソーシャルメディアを活用して、対処しながら生活していかなければならないことを理解していることが窺えた。この事例研究に参加してくれた学生たちの意見は、ソーシャルメディアを完全に信用することはできないが、従来の情報源に対しても同様にいくらか懐疑的である、と認識しているとまとめられる。

ソーシャルメディアの情報を観察し使用しているときの自分の立ち位置と認識を説明した学生の内容を以下に紹介する。

学生1:「ソーシャルメディアで情報を見つけたとき、私は、自分が大抵、自分の好む特定の情報源から情報を選んでることに気づいた。すると、前回の閲覧やクリックに基づく情報がおすすすめ表示されるようになった。私

は、考えを一新し、比較しながらより幅広くテーマについて検討するには、別の情報源をチェックしなければならないと気づいた。また、メディアのコンテンツ、コメント、ビデオの質はとてもクリアで、そこにいるかのような気持ちになり、ライブチャットを通じて意見を共有することもできる。それでも全体としてみれば、自分は、そこにいるかのように全面的には参加しておらず、部分的にしか参加していない。」

別の学生は、COVID-19パンデミック下で、なぜソーシャルメディアを学習方法として使用したのか、それが自らの学習体験とどう結びついていたのかを説明した。以下がその説明である。

学生2：「パンデミックの最中、特に、自宅に留まっていなければならないときに、オンラインで学習した。私は、外国に住む人たちが自分の意見や見解を述べているところを見ていた。主流のメディアが注目しない場面や記事に、より関心を持つようになった。テレビ番組は独自に選んだ視点で物事を見せるが、私は、自分が調べたり見たりしたいものは自分で選べると思った。そして、自分の興味が膨らんでいくのを感じた。同時に、私は、自分が見たい情報に集中できるので、学ぶべきことは自分で選んでいる。それはテレビとは異なる。私は、情報源を選び、どのテーマについて学ぶのかを決め、それに関する情報を得る能力が自分にもっとあることを、改めて考える必要があると思った。テレビは問題について一つの側面しか見せない。しかし、自分の決断に基づいてソーシャルメディアから情報を選ぶと、より具体的な、違った視点から問題を眺めることができ、両者を比較することができる。」

上記の学生の意見・見解からは、この学生が、自分が選んだ特定のテーマに関する情報を自分で見つけられることを重視していることが読みとれる。ユーザビリティは、Web2.0テクノロジーとソーシャルメディアプラットフォームの重要な特徴であり、ユーザーは、コンテンツを容易に作成、発見したり、好きなコンテンツをお気に入り登録したり、投票したり、コメントを記入したり、自分のソーシャルネットワークでそれを共有したりすることができる。また教科書、ニュースの購読、会議への参加といった従来の知識を獲得する方法は、利用するために費用がかかり、現在のウェブユーザーにとってはおなじみのテーマや関連性に基づいたカスタマイズや

フィルタリングを瞬時に行えないことが多い。他方、ソーシャルメディアは、通常は無料で利用でき、特定のテーマに関してユーザーが作成したコンテンツに、あらゆる手段ですばやくアクセスできる。多くは、興味を引き付けるフォーマットを持ち、瞬時にアクセスできる。この使いやすさが、関心のある物事を、ほとんど努力を必要とせずに学び、共有することを学生に可能にしている。ある学生の回答に、その気持ちがよく表れている。

学生3：「ソーシャルメディアやオンライン情報源は、気軽に何かを検索したいときにとりわけ便利だ。しかも無料だ。そこが教科書とは違う。だから、教科書とソーシャルメディアを両方使えば、特定のテーマを複数の角度から眺めることができる。さらに、ソーシャルメディアは知識を身に付けることに対する自分の関心をこれまで以上に広げた。」

一般に、ソーシャルメディアは、ポップカルチャー、ファッション、おもしろ動画など、中身がないことを連想させる。しかし、動画配信サイトのようなソーシャルメディアサイトでは、学問や産業界の歴とした専門家による講義、授業、個別指導、議論、分析など価値あるコンテンツが幅広く提供されている。ユーザーは、こうした高品質な情報源を見きわめることができれば、豊富な知識や理解に自由にアクセスすることが可能になる。

教室での授業やマスメディアとは異なり、学生は、主流のメディアの記事では十分に引き上げられることのないテーマや視点に合わせた学習が可能となる。こうした方法は、人種的、文化的なマイノリティや弾圧、あるいは抑圧された視点に関わる問題について調べる際に価値あるツールとなり得る。特定の集団やコミュニティ内で、またはそうした人びとによって、根拠十分な観察を発表することが可能になる。また、紛争地域や安全にたどり着くこと難しい地域にいる人々など、主流のメディアや研究者が接触できない人々に、発言の場を与えることも可能にする。さらに、現在起きている事件や差し迫った問題は、学者による厳密な分析や発表済みの報告などを蓄積する十分な時間が取れない場合がある。これらの点について、ある学生は次のように指摘している。

学生4：「自分は、ソーシャルメディアが普及する前から、世界がグローバルにつながっていることを理解していた。しかし今、ソーシャルメディアはこれまで以上に世界とつながっていると思う。LGBTQや人種的なマ

イノリティなど、少数派の意見をこれまでよりも容易に聞けるようになった。社会の隅に追いやられ、孤立を感じている人々は、ソーシャルメディアを通じて自分と同じような立場にいる人たちを見つけることができる。このように、ソーシャルメディアや国際的な知識は、自分のユニークなアイデンティティを形成するために不可欠なツールである。」

別の学生は次のように述べている。

学生5：「多くのグローバル問題や社会問題は、社会階級、地勢、情報、人種、性別、年齢における不平等に関連している。それに比べると、ソーシャルメディアはずっと平等である。すべての人々が、公平な条件でニュースを共有し、受け取ることができる。ソーシャルメディアは、学習に活用できる新しいツールだ。」

この点は、ソーシャルメディアや、多くの最先端オンラインソースにおける、ピアツーピア型コミュニケーション⁽³⁾が持つ独特な側面を提示している。こうしたコミュニケーションで語られる言葉は、大抵、何らかの管理機関や確立された考え方によって制限されることがない。特定の考え方が他の考え方より支持を集めることはあるが、ほとんどのプラットフォームは、ユーザーによるコンテンツの作成や使用を大幅に制限することはない。近年、こうしたプラットフォームは、フェイクニュース、ヘイトスピーチ、人種差別的な見方、不適切なコンテンツなどに関しては厳しく取り締まるようになったが、大部分においてコミュニケーションを取り締まる方針は存在していない。

教育という文脈で代替的な情報源を使用する際の主な懸念の1つが、ユーザーが作成したコンテンツが大量にあると、妥当性、客観性、真実性に大きなばらつきがある可能性があるという点である。学術誌、教科書、あるいは評価が確立されている信頼に足るニュースソースとは異なり、こうした情報源から提供される情報には固有の信頼性が比較的乏しい。特に、調査に参加した学生は、その信憑性を疑う意見を多く表明しながらも、ソーシャルメディアの目的や価値は理解しているように思われた。

表2. ソーシャルメディアへの信憑性についての学生自由記述回答

「ソーシャルメディアへの信ぴょう性を疑う意見等」について

フェイクニュースは注目の話題だ。だから、(ソーシャルメディアを) 利用するときは注意しなければならない。
コンテンツを自分で検索できたとしても、一次情報でないことには変わりはない。
コンテンツの作成者は内容の一部を編集したり削除したりすることがあるので、自分は、全体像が提示されていると信じることはできない。
海外に行って自分の目で問題をみれば、(ソーシャルメディアで) 示されたものとは異なる認識の仕方、理解の仕方をしていく可能性がある。実際の体験と嘘のない反応は、ソーシャルメディアの情報からは得ることができない。
ソーシャルメディアによって、自分が目にしたことが真実かどうか疑うようになっただけでなく、物事には隠しながら変えることができるものがあると、考えるようになった。ソーシャルメディアを使う以前は、そうしたことを強く考えたことがなかった。
ソーシャルメディアのクリエイターが自分の意見を表明することがある。適切なコメントを読んだときは、同じソーシャルメディアソースの、他人の見解と自分の考えを比較した。関連性がないコメントはまったく気にかけないが、重要そうに見える言葉を見つけたときはためになる。

上記の学生たちの意見・見解は全体的に、ソーシャルメディアやオンライン活動の情報および動画が信頼に足るものかどうかについての、もっともな疑問を提起していると考えられる。とりわけ事実を伝えている情報源という一側面も持ちつつ、視聴者は事実と「フェイクニュース」とを峻別するメディアリテラシーを持たねばならないと、本自由記述アンケート調査に協力してくれた学生は認識していることが窺える。また視聴者は、どれが学習に適用可能でふさわしいかを、見分けなければならず、そのスキルも更に必要になってくる。これはより独自のファクトチェックやコンテンツ検証を行っている場合が無いに等しいことから、特にソーシャルメディアに当てはまるといえよう。本調査に参加した28人の学生のうち、26人は、ソーシャルメディアの情報に対して批判的な見解を示した。以下にその一部を掲載する。

表3. デジタル時代に生きる学生のアイデンティティについての自由記述回答

「デジタル世代としての今を生きる学生のアイデンティティ」について

私は自分が育った国、コミュニティ、文化しか知らないが、自分の考えを共有することもできた。外国など、自分が住む地域以外の場所にいる多くの人が、自分と同じようにソーシャルメディアを利用していることに気づいた。
ソーシャルメディアによって、自分が自分をどう見ているかを改めて考え、今現在の自分のさまざまな側面を理解することができた。自分の意見に似た他人の意見を読むのが楽しく、幅広い人たちと気軽に意見を共有するより、そういう人たちとコミュニケーションを取りたいと自分が考えていることに気づいた。
ソーシャルメディアやオンラインソースを使うことで、自分と似たアイデンティティを持つ人たちがいることに気づけた。どのようなところが似ているのかを知るためにさらに検索することもあった。特定の話題について自分に具体的な意見があれば、それを投稿して共有した。自分に賛同する人から返答をもらい、彼らの意見を聞くこともあった。このプロセスは、自分の考え方を検討する新たな方法となった。どういうわけか、ソーシャルメディアでは気楽に自分らしくいられる。オンライン上のやり取りで自分に賛同してくれる人がいることがわかったので、自分のアイデンティティを押しつけたり無理強いしたりする必要がない。
考えや意見を共有することは、すべての人にとって基本的な活動なので、ソーシャルメディアは自分が誰なのかを示し、自分のアイデンティティや存在を共有する新しい方法なのだ。
私はあまりソーシャルメディアを使わないので、珍しいタイプなのだろうと考えていたが、COVID-19の流行中は使わざるを得なくなり、そこで自分と似た人がいることに気づいた。何というか、ソーシャルメディアは自分に新たな存在場所を提供してくれたと思う。情報の入手方法の選択肢がとても多いので、どれを選ぶかが、自分自身のアイデンティティにも影響するように感じる。例えば私は、自分自身の考えに基づいて、どれが合理的で、どれが必要であるか、あるいは重要ではないかを判断している。ソーシャルメディアを使うことで、自分を、自分と似た人あるいは全く似ていない人と比べることができるようになった。差異を知ること、自分のアイデンティティ、価値観、信念を確認することができた。

自由記述アンケート調査の回答をベースに現代のソーシャルメディアやオンラインソースにうまく対処しながら自らのアイデンティティを形成する学生にとっての可能性について考察する。

学生の多くは、この質問の回答に他の質問よりも多くの説明を費やし、この特異な時代における個人としての立ち位置や、この時代をどう眺めそこで生活しているかについて説明していた。また記述した学生の多くが、自らのアイデンティティや個人的な信念体系とソーシャル

メディアを結び付ける方法を見出していた。このことは、ソーシャルメディアが学びを得たりつながったりできる他の個人へのアクセスを、学生に提供しているというプラスの影響として捉えられるのではないだろうか。しかしこの考えとは逆に、ソーシャルメディアは、ユーザーが個別のコミュニティを自己選択し、イデオロギー的なエコーチェンバー⁽⁴⁾に足を踏み入れさせる、意見対立を助長する力としても頻繁に取り上げられている。ゆえにソーシャルメディア・リテラシーの実存するもう1つの側面であり、学生による学習においてさらに正式に取り入れていくのであれば、しっかりと認識して対処していかなければならないものでもあるといえる。

次にオンラインで行った米国2名と台湾1名の高等教育に所属する教員に米国と台湾で受け止めたオンライン教育、そして課題等について、インタビュー調査を行った。まずオンライン教育を行う中で、課題だと感じた箇所について、以下のような意見が米国と台湾の教員から述べられた。

表4. 米国と台湾の教員のオンライン教育の課題についての意見

「オンライン教育の課題について諸外国の教員からの意見」について
(米国の教員1) 文化の深い、本質的なところを説明、深く理解してもらうことがオンラインの時期は難しかった。
(米国の教員1) 実際に学んでその後参加型でブラッシュアップして習得するプロセスが、オンラインにより不可能となったため、その習得のプロセスがなかったことが、課題であった。
(台湾の教員1) 対面だとある程度科目などに適応することはできる中、オンラインだと深く適応しているのか、またどの程度適応しているのかが、教員側からは読み取ることができなかった
(米国の教員2) 特に大学院や、少人数制のセミナー形式で異文化、比較教育などを教えていく際、受講生にはある程度の共通理解、信頼があると授業がより円滑に進ことができる。しかしオンライン教育では、そのある程度の共通理解、Mutual trustを構築するのが難しかった。
(米国の教員2) Open-ended dialogue、オープンエンドな深い話し合いを行うことがオンラインではとりわけ難しかった。対面だとある程度の信頼関係、対人同士で目を向けて話していくことを通して、どんどん打ち解けて話すプロセスがあるものの、数回のオンラインではそのプロセスに到達することはできなかった。ある程度のレベルは教えることができたものの、その次の深い、本質的なディスカッションができなかった。

次にオンライン教育で見つけた新たな学生の学びへの発見について以下の意見を得ることができた。

表5. 米国と台湾の教員のオンライン教育での新たな発見についての意見

「オンライン教育での新たな発見」について
(米国の教員1) 特に米国人にとってもっと米国以外を知ろう、触れようというキッカケになったと感じる。米国の外の視点から同じ問題、テーマを考えていくことで、米国にいる自分の視点、また米国外にいる視点の人の意見を聞くことで、新たな目覚めになったと考える。(米国の教員)(台湾の教員1)あるいは(台湾の教員2)と明示するように。以下も同様。
(米国の教員2) デジタル情報が加速して容易に諸外国の情報などにアクセスすることが可能となったためたとえ物理的に遠くても、情報的には類似したり、近いものもあるということを感じくきっかけになったと感じる。
(台湾の教員1) 今自分がどの視点で立っているのか、自分のStandpointを再度認識して、諸外国、異文化の問題について再度考え直せるように、学生たちが変化していつてのが、オンライン授業を通して、ゆっくりであるが認識できた。

上記の回答から、グローバルなスキルを育成するためのモチベーションの育成、向上などが特に難しかったということが示唆される。ただ米国人学生は、国内で十分に内なる国際化を経験していることもあり、外向き思考が高いとはいえない。それゆえ、米国内を中心に意識しているパターンが多いと考えられる。したがって、よりデジタルソースを活用することで、米国外のことに興味を持つきっかけになったと考えられるのではないだろうか。米国とは対象的に、台湾は比較的日本と類似しているパターンが存在している。すなわち、欧米的な情報、外国のニュースも身近に從來から接し、身近に感じていると言う点である。そのため、率先的にソーシャルメディアを通して、現在では、韓国やアジアのソフトパワーなどのポピュラーカルチャーなどの情報をもとに、諸外国の情報を得ようとしているという様相について知ることができた。一方、米国の教員からは、オンライン授業が普遍的に実施されるまでは、比較的米国をメインとして位置づけたうえで、異文化を学んでいる学生が多かったという。彼・彼女等にとっての異文化は、あくまでも米国内における異なる異文化であり、グローバルな米国外の視点にさほどフォーカスがされていないという特徴を備えていたという。オンライン授業を通じて、異文化や

グローバルな知識を米国の教員が教えていくこと・伝えていくことを通して、率先的にメディアやソーシャルメディアの情報なども取り入り、米国人学生たちに異文化という概念が、米国内で相当する枠組みからだけではなく、米国外の枠組みからはどのように見えているのかという問いかけにも応えることを促し、そうした概念の問い直しにもつながっていたことが把握できた。

5. 考察とまとめ

調査事例や調査研究を通じて、COVID-19パンデミック以前の状況と比較してある程度のリモート学習の必要性、そしてソーシャルメディアとデジタル活用から、学生にとって自分の知らないテリトリーを身近に知る契機となりうるということが知見として得られた。今後さらに、他の日本の大学や他の国々に範囲を拡げて調査を進めることで、今回の小規模な調査結果を検証することができるのではないだろうか。自由記述アンケートやインタビュー調査に参加した学生たちは、オンラインメディアやインターネットリテラシーに関する経験を既に十分積んでおり、従来型の教室での講義を補うために、非公式のオンライン学習を活用することに慣れていた。国際経験や海外留学という視点から見た場合、オンライン教育は資金面での障壁が海外留学プログラムに比べてはるかに低い、必ずしもすべての学生がインターネットを使ったテクノロジーにアクセスし、それに熟達しているわけではないという別のイシューも存在する。それゆえ、次の課題として、オンラインやソーシャルメディアに親和性が必ずしも高くない対象者に調査を拡大する必要性があると思われる。

COVID-19パンデミックは、オンライン教育を選択肢の1つから必要不可欠な存在へと変容させたといえる。隔離期間中、教員・学生の双方が自分たちで促されれば、従来の対面での授業からオンライン授業という新たな授業形態に適応できることを知ったともいえるCOVID-19パンデミックの経験を経て、インターネット、リモート学習、そしてソーシャルメディアなどの代替の情報源から、学習環境が大きな恩恵を受けていることが本調査を通してより明白になった。著者自身、地球市民としての知識の獲得を目標として、提供している国際学関連の授業は、コロナ禍において最も影響を受けた教育分野のひとつであったと考えている。COVID-19パンデミックにより、国境が封鎖され、外国人学生の入国措置が制限されたことにより、世界中が、オンライン通信やメディア

プラットフォームを介してインターネット経由で情報を取得する技術に強く依存することになり、実質的な移動は不可能であった。

本稿では、COVID-19以前とその最中に、リモートでのオンライン教育やソーシャルメディアの利用がどのように展開したかを学生および教員への調査から検討した。リモートでの授業は、学生の手が届く範囲で知識の境界を拡大し、ソーシャルメディアの積極的な活用は、自己アイデンティティという概念に基づいて発展する可能性を見出した。しかし、これらのツールは、従来は十分に活用されてきておらず、従来の教育方式と比較して必ずしも重点的に取り上げられてきたわけではない。

従来から存在していたオンライン教育の意義や可能性をCOVID-19パンデミックにより、ロックダウンと急遽教育方法を変更するという事により、これらの既存のツールを改めて見直すことになったともいえる。本調査を通じて、回答した学生たちは、全体的に、ソーシャルメディアの情報源を積極的に活用していると考えており、そこで、コンテンツを検索したり、結果をフィルタリングしたり、コメント、いいね、その他投票形式の機能を使って、仲間たちと関わり合っていた。学生の回答者は、全体的にオンラインソースを新たな視点をもたらす貴重な情報源と捉えており、伝統的な情報源を検証する、強化する、あるいは傷つけるものになり得るとみなしていた。すなわち、学生たちは、ある程度の情報に関するリテラシーを備えてインターネット上の情報の事実性や価値を客観的に、十分懐疑的に検証していたことが知見として得られた。

しかし、一方教員は、学生の中にはソーシャルメディアやオンライン上の情報の妥当性や価値を批判的に評価できない者がいることにも引き続き十分注意を払う必要がある。情報の妥当性や信頼性を検証しないでソーシャルメディアやオンライン上の情報を使用する、あるいは拡散することの危険性や倫理的問題が広がっていくという危険性があるからである。こうした懸念材料の存在も踏まえて、画期的なオンライン教育の方法がもたらすメリット・デメリットを継続的に検証していかねばならないだろう。

謝辞

2021年から2022年にかけて本調査に回答を寄せてくれた28人の学生すべてに心から感謝する。また諸外国の高等教育に在籍する教員方3名にもオンラインによる

インタビューの時間を割いていただいたことに感謝の気持ちを伝えたい。協力してくれた全ての対象者に共通するのは、何よりもこの困難な時期に回答をしてくれたことであり彼らに対して深謝したい。とりわけデジタルネイティブ世代の彼らは、オンラインソースを活用しているため、教育ツールとしてのソーシャルメディアを研究するための多様な視点をもたらしてくれたことにお礼を伝えたい。

注記

本稿は、拙著“Internationalization of higher education during the COVID-19 Pandemic: A case study of the Japanese digital native generation and social media use”から出版された『Globalisation, Values Education and Teaching Democracy』2023をベースに、新たなインタビュー調査を設け得たデータを加え、加筆修正を行なったものである。

注

- (1) 本調査は、2021年度科研費基盤研究(B)「コロナ時代の高等教育頭脳循環の国際比較研究—新たなモデル構築に向けて」(山田礼子代表)の研究の一部として2022年6月から8月にかけて実施したインタビュー調査の一部である。
- (2) 本調査は2021年の筆者が所属している学部の学生を対象に行った自由記述型アンケート調査である。
- (3) 「ピアツーピア型」コミュニケーションとは、接続されたコンピューター同士が対等の立場でデータのやり取りをする接続または通信方式のことを意味している。
- (4) エコーチェンバー(Echo chamber)とは、自分と同じ意見が、まるで音響があらゆる方向から返ってくる「反響室」のように、同じ意見が多数戻ってくる現象である。ある一定の狭いコミュニティの中で、同じような意見を見聞きし続けることによって、自分の意見が増幅・強化されることを指す。

参考文献

- 木村忠正(2012).『デジタルネイティブの時代—なぜメールをせずに「つぶやく」のか』,平凡社.
- 黄美蘭(2022).「新型コロナウイルス感染症による大学生活における不安と抑うつ—中国人留学生の場合」『異文化間教育』56, pp.60-78.
- 高橋利枝(2014).「デジタルネイティブを越えて」『Nextcom』18, pp.50-59.
- 高橋利枝・本田量久・寺島拓幸(2008).「デジタル・ネイティブとオーディエンス・エンゲージメントに関する一考察—デジタル・メディアに関する大学生調査より」『応用社会学研究』50, pp.71-92.
- 高橋利枝(2019).「人工知能(AI)とロボットがもたらす社会的インパクト—「ヒューマン・ファースト・イノベーション」

- ン」に向けて」『情報システム学会誌』14.2, pp.7-17.
- ホーン川嶋瑤子 (2021). 「アメリカの教育デジタルトランスフォーメーション—その進展, コロナ禍のインパクト, 教育の再編成」『グローバル化, デジタル化で教育, 社会は変わる』東進堂, pp.153-195.
- 成田康昭 (2012). 「現実の3つの側面—オンライン空間とアイデンティ形成」『応用社会学研究』54, pp.101-117.
- 額賀美紗子・高橋史子 (2021). 「コロナ危機と教育格差の拡大—米英の状況から見るマイノリティの教育機会と公教育の役割再考」『異文化間教育』54, pp.1-18.
- Aleksandrova, Y. G. & Parusheva, S. S. (2019). Social media usage patterns in higher education institutions: An empirical study. *International Journal of Emerging Technologies in Learning (iJET)*, 14(5), 108-121.
- Ansari, J. A. N. & Khan, N. A. (2020). Exploring the role of social media in collaborative learning the new domain of learning. *Smart Learning Environments*, (7)9.
- Barberá, P. (2020). Social media, echo chambers, and political polarization.: Forthcoming in N. Persily & J. Tucker (Eds.), *Social media and Democracy: The state of the field, prospects for reform*, SSRC Anxieties of Democracy, 34-55. Cambridge: Cambridge University Press.
- Beelen, J. & Jones, E. (2015). Redefining internationalization at home. In A. Curaj, L. Matei, R. Pricopie, J. Salmi & P. Scott (Eds.), *The European higher education area: Between critical reflections and future policies*, Vol. 1, 59-72.
- Bruhn, E. (2017). Towards a framework for virtual internationalization. *International Journal of E-learning & Distance Education*, 32(1).
- Brux, J. M. & Fry, B. (2010). Multicultural students in study abroad: Their interests, their issues, and their constraints. *Journal of Studies in International Education*, (14)5, 508-527.
- Gourlay, L. (2013). Posthuman literacies? Technologies and hybrid identities in higher education. In S. Warburton & S. Hatzipanagos (Eds.), *Digital identity and social media*, 29-36.
- Government of Japan. (2021). Science, Technology, and Innovation Basic Plan.
https://www8.cao.go.jp/cstp/english/sti_basic_plan.pdf (最終アクセス日 2022年7月15日)
- Guth, S. (2013). State University of New York (SUNY) CoIL Center. The COIL Institute for global networked learning in the humanities.
https://coil.suny.edu/sites/default/files/case_study_report.pdf (最終アクセス日 2022年5月15日)
- Hussain I. (2012). A study to Evaluate the Social Media Trends among University Students, *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, Volume 64, 639-645.
- Institute of International Education. (2020). Open Doors: 2020 Fast facts.
<https://opendoorsdata.org/wp-content/uploads/2020/05/Open-Doors-2020-Fast-Facts.pdf> (最終アクセス日 2022年9月01日)
- Institute of International Education. (2021). Open Doors: 2021 Fast facts.
https://opendoorsdata.org/fast_facts/fast-facts-2021/ (最終アクセス日 2022年9月01日)
- Japan Association of Overseas Students. (2021). JAOS Survey report 2021 and JAOS Guidelines.
https://www.jaos.or.jp/wp-content/uploads/2021/06/JAOS-Survey2021_210611_en.pdf (最終アクセス日 2022年11月01日)
- Japan Student Services Organization. (2021). Result of international student Survey in Japan, 2021.
https://www.studyinJapan.go.jp/en/_mt/2022/03/date2021z_e.pdf (最終アクセス日 2022年9月01日)
- Jorgenson, S. & Shultz, L. (2012). Global Citizenship Education (GCE) in Post-Secondary Institutions: What is Protected and what is Hidden under the Umbrella of GCE? *Journal of Global Citizenship & Equity Education*, 2(1), 1-22.
- Knight, J. (2016). Meaning, rationales and tensions in the internationalisation of higher education. In S. McGrath & Q. Gu (Eds.), *Routledge handbook of international education and development*, 325-339. Abingdon, England: Routledge.
- Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology, Japan (MEXT). (2020). Education in Japan beyond the crisis of COVID-19.
https://www.mext.go.jp/en/content/20200904_mxt_kouhou01-000008961_1.pdf (最終アクセス日 2022年9月01日)
- Moreira, D. (2016). From on-campus to online: A trajectory of innovation, internationalization and inclusion. *International Review of Research in Open and Distributed Learning*, (17)5, 186-199.
- National Center for Education Statistics. (2021a). Table 311.15. Number and percentage of students enrolled in degree-granting postsecondary institutions, by distance education participation, location of student, level of enrollment, and control and level of institution: Fall 2018 and fall 2019. IPEDS Data Explorer.
<https://nces.ed.gov/ipeds/search/ViewTable?tableId=29450> (最終アクセス日 2022年11月01日)
- National Center for Education Statistics. (2021b). IPEDS Data Explorer.
<https://nces.ed.gov/ipeds/search/ViewTable?tableId=29450> (最終アクセス日 2022年11月01日)
- Oxley, L. & Morris, P. (2013). Global citizenship: A typology for distinguishing its multiple conceptions. *British Journal of Educational Studies*, 61(3), 301-325.
- Palfrey, J. & Gasser, U. (2011). Reclaiming an Awkward Term: What We might Learn from “Digital Natives” In Thomas,

- M(ed.) *Deconstructing Digital Natives*. NY and London: Routledge.
- Pew Research Center. (2021). Social media fact sheet. <https://www.pewresearch.org/internet/fact-sheet/social-media/> (最終アクセス日 2022年11月01日)
- Porter, R. & Porter, N. (2020). Japanese college student's study abroad decisions: Perspectives of Japanese study abroad administrators. *The International Education Journal: Comparative Perspectives*, 19(2), 54–71.
- Selwyn, N. (2012). Social media in higher education. *The Europa World of Learning*, 1(3), 1–10.
- Takahashi, T. (2011). Japanese Youth and Mobile Media. In Thomas, M(ed.) *Deconstructing Digital Natives*. NY and London: Routledge.
- UNESCO Institute for Statistics. (2019). Global flow of tertiary-level students. <http://uis.unesco.org/en/uis-student-flow> (最終アクセス日 2022年11月01日)
- Yamada, A. (2021). Globalisation in higher education: Bridging global and local education. In: Zajda J. (eds.) *Third international handbook of globalisation, education and policy research*. Springer.

(やまだ あき)